

## 隠岐諸島ジオパーク固有の生態

### 固有種

約 1 万年前に、海抜上昇により隠岐諸島は本州から切り離された。これは進化の期間としては比較的短い期間であると言いき、諸島に見られる植物と動物の大半は同様に本州でも見られる。しかし、隠岐に生息する一部の動植物は異なる発展を遂げた。オキタンポポはガク、総苞片ともいう花と茎をつなぐ緑の部分が一般的なタンポポとは異なる。花が咲くと、一般的なタンポポのガクは裏側に反り緑の花びらのような形状となるが、オキタンポポはガクが花にぴったりとくっついている。

もうひとつの島の固有種、オキサンショウウオには非常に珍しい進化の過程を経験している。彼らは流水性と止水性の両方の特性を持っているのだ。遺伝子の調査からは、溪流に棲むタイプのサンショウウオが池などに棲むタイプに進化し、また島で山の豊かな溪流の環境に棲むようになったため、部分的に溪流のタイプに逆戻りの進化をしていることが明らかになった。この種は現在環境庁により絶滅危惧種に分類されている。

### 複合的な生態系

隠岐諸島の生態系は、大きく異なる気候の植物同士が共存していることが特徴である。一般的に寒冷な国内最北部や高地で生育する種が、熱帯や熱帯に近い日本南部で生育する種と共に生育している。例えば、カタクリとハマナスは日本北部の種であるが、隠岐諸島ではこれらを黄色いハイビスカス（ハマボウ）やナゴランなどの亜熱帯や暖かい気候の地域の花とともに見ることができる。

北部由来の植物や高山植物は島がまだ本州とつながっていた氷河期に島へ渡って来て、氷河期が過ぎた後に本州南部では絶滅した後もこの島では生き残ったと考えられている。南国の植物は日本の北西海岸に沿って流れる対馬暖流により種が運ばれてきたのだろう。